



(EA) シノワズリの人物花鳥文カップ&ソーサー  
景德鎮窯で製作(1690~1710年)、イグナーツ・ブライスラーによりポーランド、ウラツワフで絵付け  
(1720~1730年) 中国/ポーランド 磁器 彩色 (大英博物館所蔵)



(EE) 男女像 磁器人形  
(おそらくヴィクトリア女王とアルバート王  
スタッフオードシャーの窯  
イギリス 1840～1850年 陶器  
(ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵)



(AE) 広東西洋商館図壺  
中国 1780~1790年ごろ  
清代 磁器 粉彩 (大英博物館所蔵)

うち、ブルボン家のコンデ公によつて築かれたシャンティイ窯は、とくに日本の柿右衛門様式の写しの生産で知られる。一方、イギリスのチャルシ窯は一七四五年に開窯し、一七八四年には閉窯するという短命の窯ではあつたがマイセンの模倣とともに、柿右衛門様式の写しや人形の製作で一時代を築い

た。ただし、十分な力オリンに恵まれなかつたイギリスでは、粘土にウシやヒツジの骨を焼いた灰を混せるというボーン・チャイナの技法がボウ窯で開発されその後のイギリスにおける陶磁器の大量生産を支えることとなつた。この技法を取り入れたスタッフオードシャーのジョサイア・スプードは、また、柳の木

国の山水樓閣図をもとにした、いわゆる「ワイロウ・パターン」をミントン社の創始者トーマス・ミントンから受け継ぎ、銅版転写の技法を用いて広く普及させたことでも知られる。

ツバのあいだで、さらにはアジアとヨーロッパのそれぞれの内部で、製品・技術、絵柄のやり取りが、互いに複雑に絡まりあいながら展開してきた。今回の展示では、そうした絡まりあいを解きほぐして点検できるよう、東西の陶磁器や磁器人形を、アジアから見たヨーロッパ像を示すもの（A-E）、アジアから見たアジア像を示すもの（A-A）、ヨーロッパから見たヨーロッパ像を示すもの（E-E）、ヨーロッパから見たアジア像を示すもの（E-A）に整理して展観している。器壁に描かれた絵柄や、磁器人形の姿がたちのなかに、アジアとヨーロッパのあいだで取り交わされたつなぎしのやり取りがうかがえるはずである。

# 陶磁器に刻印された まなざしの交錯 —特別展「アジアとヨーロッパ の肖像」から

吉田 憲司（よしだけんじ）



(AA) 松の下で簾を割く3人の男性の図 皿  
中国? 1736~1750年 青花磁器 (大英博物館所蔵)

今回の特別展「アジアとヨーロッパのあいだの肖像」は、アジアとヨーロッパのあいだで交わされたあなざしの絡まりあいを歴史的にたどろうという試みである。こうしたまなざしのやり取りを簡潔に俯瞰するうえで、格好の資料となるのが陶磁器である。

アジアとヨーロッパの直接の接触が始まった一六世紀当時、ヨーロッパにはまだ磁器生産の技術はなく、磁器については中国から輸入する以外にすべはなかつた。インド航路の開拓は、中国からされた磁器は、オランダ東インド会社の重要な交易品となつた。まもなく、中国の徳鎮をはじめとする中国の窯で制作された磁器は、オランダ東インド会社の重要性が明から清へと移る動乱期に入り、中国磁器の輸入が困難になると、オランダ東インド会社は日本にその代わりの役割を求めた。おりしも、日本では、農臣秀吉によるいわゆる文禄・慶長の役（一五九二～一五九八年）の終結とともに朝鮮半島の陶工が渡来し、ようやく磁器生産が始まつたばかりであつた。一六四〇年ごろには酒井田柿右衛門の手ですでに赤絵の技法も確立されていた。こうして、大量の有田の磁器が近隣の伊万里の港から積み出され、ヨーロッパや東南アジアへ輸出していくことになる。「伊万里焼」の名は、この積み出し港の名に



(AE) 犬と散歩する  
ヨーロッパ人カップルの図 皿  
中国 1715~1725年  
清代 色絵磁器 (大英博物館所蔵)

由来する

一方、ヨーロッパでも、独自に磁器製造への試みがなされた。試行錯誤の末に一七〇九年、ついにドイツのマイセンで磁器の製作技術が開発される。その技術はほどなく流出して、ヨーロッパ各地に伝わり、各所で磁器の生産が開始されいく。各国の王侯にとつて、独自の磁器工場をもつことが、いわばステイタス・シンボルとなつていったのである。この由来する。